

「福島の子どもたちを被爆させたのは誰か」

河野 徳有

昨年秋に発表された福島県の子どもたちの甲状腺調査結果は衝撃的なものでありました。子どもたち4万2千人の43%に異常が見られ、特に小学生、中学生の女子では何と53%に異常が見られたそうです。そして残念なことに調査した子どものなかに1人甲状腺ガンの子が見つかったそうです。

ロシアのチェルノブイリ原発事故の後に調査したときは0.5%だったということでもありますから、今回の数字が途方もなく高いことがよくわかります。チェルノブイリでは多くの方が被爆がもととされる甲状腺ガン等の病気で亡くなっています。

しかも恐ろしいことに、この国では、こういった事実を詳しく報道するテレビや新聞等のマスコミはないということです。

今なお避難生活を強いられている人々が多数いらっしゃいます。体に異変をきたしている人、現在だけでなく、将来に不安をもつ子どもたち、子どもたちを被爆させてしまった親の苦しみ、大きな悲しみや苦しみがうずまく福島。

しかし、こういった現状でもなお、原発を推進しようとする動きがあります。原発がないと電力が不足すると言っている人がいます。原発は安価であり安全だと言う人がいます。日本の発展には原子力が必要なのだと、訴えている人がいます。

前総理大臣が「原発をゼロにする」と発言した翌日には、経済界からすぐに反論の記者会見が行われました。原子力規制委員会が「活断層の可能性が高い」と発表すればすぐに否定する電力会社。

「スピーディ」のデータは知らされず、事故に備えて蓄えられていたヨウ素剤は配布されませんでした。これらは想定外の自然災害ではありません。いったい誰が子どもたちを被爆させたのでしょうか。

被爆し甲状腺に大きなしこりができていたり、ガンになってしまったりしたのが、自分の妻や子どもであったのなら、それでも原発は安全で必要なのだと言うのでしょうか。

「すべてのものはつながっているのだ」という真理をお釈迦様は示してくださいました。しかし、私たちは、そのことがしっかりと受け取れないでいます。他人ごとであり、自分の悲しみや苦しみとして受け取っていけないのです。

原発を進めていこうとする勢力を批判し、悪とし、自分は善であるかのように振舞っている私も、果たして本当に自分自身の問題として考えられているのでしょうか。

問題を通して自分自身が問われてきます。